
紫陽花色の思い出

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫陽花色の思い出

【Nコード】

N6051A

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

遠い昔、雨が大好きな男の子に出会った。その男の子から借りた傘を私は今でも大切に持っている。幼い息子も雨が大好き。紫陽花の咲く雨の季節の思い出を、私はふと思い出す…

五歳になる息子の淳平は、雨の日に散歩に行くのが大好きだ。

土曜日の昼下がり。淳平は黄色いレインコートを着て、はしゃぎながら玄関に走って行く。

「ママ、ママ、早く！ 雨が止んじゃうよ」

「お散歩の時は、雨が止んだほうがいいじゃない。そしたら、濡れなくていいでしょ」

私は淳平の後を追って玄関に走る。

「やだ。ぼくは雨が大好きだもん」

淳平は玄関に座り、小さな手を伸ばして黄色い長靴を履こうとする。

淳平は変わった子だ。お日様の照った晴れた日の散歩より、雨の日の散歩が好きなんて。

「どうして雨が好きなの？」

私は淳平に聞いてみる。

「雨がパラパラ降ってくる音が好き。水たまりの水をバシバシやはねて歩くのも好き。でも、一番好きなのはねえ、傘を差して歩くこと！」

淳平の答えを聞いて、私はふと、遠い昔同じようなことを言っていた男の子のことを思いだした。

両方の長靴を履いた淳平は、ピョンと勢いを付けて立ち上がる。

そして、傘立てからアニメキャラのイラスト付きの黄色い傘を取りだした。淳平のお気に入りの傘だ。

「ねえ、ママ。傘立てに置いてある小さい青い傘は誰の？」

大きな大人の傘の中に、一つだけ小さな子供用の傘がたたんだままの状態で立っている。それは、淳平の傘ではなかった。もう随分長い間、誰も使っていない、古い小さな子供用の傘。でも、私はずっと捨てられなくて、結婚した後家から持ってきてしまった。

「その傘はね、ママの思い出の傘なの」

私は傘立てから青い傘を取りだし、そっと広げてみる。広げた傘に、ひらがなで大きく名前が書いてある。『さいとうさとし』。幼い頃、雨の日に出会った見知らぬ男の子。名前が『さいとうさとし』という事以外、何も分からない。どんな漢字を書くのかも分からない。だけど、あの雨の日のことは、今でもよく覚えている。紫陽花色の私の思い出……。

あれは、まだ私が淳平と同じ幼稚園児の頃。梅雨に入り、雨が降ったり止んだりする日が続いていたある日。梅雨の雨が止み、空に薄く日が差したのを見て、私は直ぐにマンションを飛び出し、公園に遊びに行った。雨降りが続き、ずっと外で遊べなかった私は、厚い雲の合間からのぞく小さな青空が嬉しくて、はしゃぎながら走って行った。

雨が止んだばかりで、公園にはまだ誰もいない。ブランコも滑り台も雨粒で濡れ、砂場も湿っていた。

「つまらないなあ」

服を濡らしたり泥だらけにすると、母親に怒られる。私は仕方なく、公園の遊具を諦めて、紫陽花の花が咲き誇る花壇の方へ行ってみた。この前、紫陽花の花の中にカタツムリを見つけたばかりだ。

「カタツムリさん、いないかなあ？」

雨に洗われた紫陽花は、とても綺麗だ。花にも葉っぱにも小さな水滴がたくさんついて、キラキラ光っている。私は紫陽花の葉っぱを一枚一枚見ながら、カタツムリを探した。

「カタツムリを探しているの？」

夢中で紫陽花を見つめていた私の背後で、突然声がした。驚いて後を振り返ると、そこには小さな男の子が立っていた。片手に傘を持ち、片方の手のひらを上に向けて胸の所に広げている。

「あつ、カタツムリ！」

私は直ぐに男の子の元に駆け寄る。男の子の小さな手のひらの中に、カタツムリがのっかっていた。

「どこにいたの？」

「さっき紫陽花の中にいた」

男の子の手のひらをノソノソとはっているカタツムリの角を、私は人差し指でチョンとつついた。カタツムリの角がじわっと引っ込む。

「フフ、くすぐったい」

男の子は声を立てて笑った。カタツムリは、ゆっくりと男の子の手のひらから腕の方へと移動していく。

「あなたもこのマンションに住んでるの？」

「うん、ママと一緒にママのお友達の家遊びに来たの。ママはまだお友達の家にいるよ」

「ふーん、あなたも幼稚園児？」

私は、この頭の良さそうな小さな男の子になんとも興味がない。

「そうだよ」

「どこの幼稚園？」

「なつみ幼稚園」

聞いたことのない幼稚園の名前だった。

「ここからずっと遠いところにある幼稚園だよ」

首を傾げる私に、男の子は答えた。

「カタツムリ、紫陽花に返してあげようよ」

「うん」

男の子は片手でカタツムリを掴むと、紫陽花の葉っぱの上にちょこんとのせた。頭を殻の中に隠していたカタツムリは、またじわっと頭を出してゆっくりと移動し始める。

ポツン、ポツン。その時、空から雨粒が落ちてきた。雨粒は、紫陽花の花を揺らせ始める。

「あ、雨が降ってきた……」

慌ててマンションを飛び出して来た私は、傘を持って来るのを忘れていた。私の頭の上にも雨粒が落ちてきて、私は手で頭をおさえる。

すると、男の子が、小さな青い傘を私の頭の上にかざしてくれた。

「ありがとう」

私は笑って男の子を見つめる。男の子も楽しそうに笑っていた。

「ぼくね、雨の日って好きなんだ」

「どうして？ わたし、雨は嫌い」

「雨の日は傘がさせるだろ？ ぼく、傘に降ってくる雨の音を聞くのが好きなんだ」

「ふん」

雨はまた、段々強く降り始めてくる。小さくのぞいていた青空も見えなくなってしまった。

「わたしは晴れの方が好き」

だけど、男の子と一緒に青い傘の中に入っているのが、わたしはなんだか嬉しかった。それが相合い傘というものなんだとは、その時は分からなかったけれど。二人で一つの傘に入っているのは、なんとなく安心出来る。その時だけは、雨が降り止まなければいいのに、と私は心の中で思った。

それからしばらくして、男の子の母親が男の子を迎えにきた。男の子は私に青い傘を差し出す。

「君に貸してあげる」

男の子はニッコリ笑ってそう言った。私はキョトンとしながらも、

男の子から傘を受け取った。

「じゃあね、バイバイ！」

「あっ」

男の子は降りしきる雨の中に走り出すと、母親の差す傘の中に飛び込んでいった。

男の子はもう一度私の方を振り返って、大きく手を振る。そして、母親とともにそのまま歩いて行った。私は男の子の青い傘を差し、

母親と男の子の後姿を、黙って見つめていた。やがて二人の姿は、雨の中に消えていった。

私の頭上に広げた青い傘には、『さいとうさとし』とひらがなで大きく書かれていた。差した傘を見上げ、私は声に出して読んでいる。

「さいとうさとし」

傘を打つ雨の音を聞きながら、私は青い傘の文字をずっと見つめていた。

「さいとうさとし」

淳平は私から小さな青い傘を受け取り、書かれている文字を読む。
「ママ、さいとうさとしって誰？」

「ママが小さい頃に会った男の子、この傘の持ち主よ。その子から傘を借りたままなの」

「返さなくていいの？」

淳平は驚いたように目を丸くして、私を見上げる。

「いつか会える日が来たら返そうと思っていただけだね」

私はクスツと笑う。さとし君ももう大人になっているはず。だけど、私の心の中のさとし君は、ずっと幼稚園児の小さな男の子。

「ふ〜ん」

淳平はちよつと考え、いつもの淳平の傘を傘立てに戻す。

「じゃあ、今日はぼくがこの傘使うよ。傘差して歩いていたら、さとし君が気付いてくれるかもしれないから」

淳平は、さとし君の青い傘を肩にかけてクルクルと回す。

「そうね、気付いてくれるかもしれないわね」

「ママ、早く行こう！ 雨が止んじやうよ」

私は淳平にせかされて、外に出た。外は雨。道ばたに咲いている紫陽花達が、気持ち良さそうに雨に打たれている。大きな私の傘と小さな『さいとうさとし』君の傘。二つ並んだ傘からパラパラと楽

しそうな雨の音が聞こえてきた。淳平もさとし君も雨が好き。私も
少しだけ雨が好きになってきた。

完

（後書き）

「テーマ小説」で投稿予定だった「雨」をテーマにした小説が二つ出来たので、その一つを投稿します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6051a/>

紫陽花色の思い出

2010年10月8日15時50分発行